

日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム
Japanese American Leadership Symposium

文化で読み解くコミュニティ ～日系アメリカ人の視点から～

Culture and Community Engagement A Japanese American Perspective



2017年3月6日(月) 18:00~20:00
Monday, March 6, 2017 18:00-20:00
会場: ホテル日航金沢 3階 孔雀の間
Venue: Hotel Nikko Kanazawa "Kujaku" (3rd Floor)

主催: 国際交流基金日米センター
Organized by: The Japan Foundation Center for Global Partnership (CGP)

共催: 米日カウンシル
Co-Organized by: U.S.-Japan Council (USJC)

後援: 外務省、石川県
Supported by: Ministry of Foreign Affairs, Ishikawa Prefectural Government

CGP
The Japan Foundation
Center for Global Partnership
国際交流基金日米センター

**U.S.-JAPAN
COUNCIL**

プログラム

国際交流基金日米センター(CGP)は、外務省「日系アメリカ人リーダー招へいプログラム」で来日した日系アメリカ人をパネリストに迎え、毎年シンポジウムを開催しております。

本年度のタイトルは、「文化で読み解くコミュニティ～日系アメリカ人の視点から～」。コミュニティ振興において文化が果たす役割について、日系アメリカ人の視点を踏まえ読み解きます。

文化で読み解くコミュニティ ～日系アメリカ人の視点から～

発表

発表者/パネリスト

● レスリー・イトー

日米文化会館 (JACCC) 館長 兼 CEO

『リトルトーキョーを持続可能な姿へ：
世代を超えた、コミュニティ主体のイニシアティブ』

● ケン・ラッセル

マイアミ市議会 議員

『緑化活動によるコミュニティ構築』

● ウェンディ・タカヒサ

モルガン・スタンレー社

コミュニティ・リレーションズ部取締役

『文化とコミュニティ開発ーチェルシー地区を例に』

ディスカッサント

● 福光 松太郎

株式会社福光屋 代表取締役社長

モデレーター

● 佐々木 雅幸

文化庁 文化芸術創造都市振興室長

同志社大学 特別客員教授

● アイリーン・ヒラノ・イノウエ

米日カウンシル 会長

討論

・パネルディスカッション ・質疑応答

パネリスト



レスリー・イトー

日米文化会館 (JACCC) 館長 兼 CEO

1971年に設立されたJACCCは、米国で最大の文化センターの一つ。イトー氏はカリフォルニア・コミュニティ財団の芸術・健康部門のプログラム・ディレクター、ロサンゼルス郡芸術委員会での補助金プログラムのディレクター等を歴任後、JACCCの館長に就任。また、フォード財団ではメディア・芸術・文化部門のプログラムアソシエートとして従事した。同氏は、ロサンゼルス・アジア・アメリカン・アンド・パンフィック・アイランダー・ギビング・サークルの共同設立者でもある。ロサンゼルス出身。



ケン・ラッセル

マイアミ市議会 議員

2015年にマイアミ第2地区の議員に日系人として始めて当選。その直後より、市議会の副議長、ダウンタウン開発局長の他、ココナッツ・グローブビジネス改善地区、コミュニティ再開発機関の議長などを務める。同氏は交通機関改善、ホームレス問題、住宅の価格設定の適正化のほかには街の緑化を優先順位として掲げており、マイアミのイチムラ日本庭園の修復にも携わった。40カ国でビジネスを展開し、複数のサードボード関係のチャリティ・イベントに資金を提供。また、プロのヨーヨー・プレーヤーとして過ごしたという経験もある。西宮にある関西学院大学で国際ビジネスを勉強し、ノースカロライナ大学で経営学の修士号を取得した。



ウェンディ・タカヒサ

モルガン・スタンレー社 コミュニティ・リレーションズ部取締役

コミュニティ・リレーションズ取締役として、モルガン・スタンレー社が地元ニューヨークの人々と連携し、ニーズに対応したコミュニティ開発を行うよう尽力。過去30年のキャリアの多くは、銀行が低・中所得者層へも確実にサービス提供を行うことに焦点をあててきた。過去にはシティグループに所属し、20年に渡ってグローバル・コンプライアンス・プログラムの業務執行取締役などの要職を歴任。また、アジア系アメリカ人をはじめとする援助を必要とする人々への支援を行うNGO団体、アジア・アメリカン・フォア・イコリティー (AAFE) の会長を12年もの間務める。ニューヨーク日系アメリカ人会、日系アメリカ人市民同盟といった団体にも関与しており、ニューヨークの日系アメリカ人コミュニティの活動的なメンバーである。

ディスカッサント



福光 松太郎

株式会社福光屋 代表取締役社長

株式会社福光屋代表取締役社長。石川県酒造組合連合会理事、金沢酒造組合理事長、石川県日伊協会会長、金沢クラフトビジネス創造機構理事長、日本デザイン振興会理事、金沢市創造都市推進委員会実行委員長などの要職を兼任。1999年金沢市文化活動賞、2005年デザイン・エクセレント・カンパニー賞などを受賞。2010年藍綬褒章受章。

モデレーター



佐々木 雅幸

文化庁 文化芸術創造都市振興室長
同志社大学 特別客員教授

同志社大学特別客員教授および大阪市立大学名誉教授。京都大学大学院経済学研究科博士課程終了。京都大学博士（経済学）、金沢大学教授、立命館大学教授、大阪市立大学大学院教授などを経て、2014年現職。文化庁文化芸術創造都市振興室長、創造都市ネットワーク日本の顧問も兼任。



アイリーン・ヒラノ・イノウエ
米日カウンシル 会長

1988年～2008年に全米日系人博物館館長、2009年からワシントンDCに拠点を置く非営利団体米日カウンシルの会長を務める。13年間のT.H.E.クリニック（非営利の多民族系診療所）勤務を含め、35年以上にわたり、米国全土の多文化コミュニティにおけるNPO運営、教育・広報活動に携わる。芸術・人文に関する大統領諮問委員会委員、スミソニアン・アメリカ歴史博物館理事などを歴任し、現在もフォード財団理事、クレスゲ財団理事など多数の要職を務める。2009年4月、日系人社会の結束強化や日系人と日本人との関係強化における長年の功績による外務大臣表彰を受けた。2011年国際交流基金賞受賞。



茶野 純一（国際交流基金日米センター所長）

国際交流基金日米センターは、現代社会が直面する各種の政策課題の解決に向け、日米両国が共に知恵を出し合い協力を進めていく事が必要との考えから、今から約25年前、1991年に国際交流基金内に設立されました。以来、国境を超える様々な政策課題について日米の知的交流の枠組みの中で議論を進め、日米二国間関係の強化、緊密化に取り組んでいるところです。

本日のシンポジウムは外務省による日系アメリカ人リーダー招へいプログラムの一環として、米日カウンシルと日米センターの共同企画として実施しております。シンポジウムは本年で第17回目の実施となりますが、金沢市での開催は今回が初めてとなります。

本日のテーマとして、コミュニティ振興において文化が果

たす役割を取り上げました。日本全国においてコミュニティの活力に陰りが見られるといった議論もある中、金沢市は長い歴史の中で培ってきた文化資源を活かしながら、また一方では現代アートのような新しい要素も取り込みながら、明確なビジョンのもと、街づくりを推進してきました。ユネスコの創造都市ネットワークにも認定されました金沢市の事例に学びつつ、米国の都市の比較、あるいは日系アメリカ人の経験を交え、このテーマを考えてみたいというのが、本シンポジウム開催の趣旨でございます。同時に、移民共生を巡る議論が世界で複雑化しつつある中、コミュニティの発展と社会の多様性、包摂に係る課題についても、日系アメリカ人の過去の経験からどのような教訓が得られるのか、ご来場の皆さまと共に考えていきたいと存じます。

開催にあたりましては外務省、さらに国際交流基金が連携協定を締結しております石川県より、シンポジウムに対するご後援を頂いております。開催に向けご尽力いただいた皆さまに対し心より御礼を申し上げます。



アイリーン・ヒラノ・イノウエ（米日カウンシル会長）

繋がりを発展させていくことです。多様な教育プログラムを通し、米日カウンシルは両国の様々なリーダーとともに活動しています。

米日カウンシルの主要な活動の一つに、TOMODACHIイニシアチブがあります。これは東日本大震災に際し米国大使館が米日カウンシルに運営を求めたことから始まり、日本政府も支援をしている官民共同の活動です。教育や文化交流、そしてリーダーシップ・プログラムを通して、米日の次世代のリーダーを育成しております。これまでに3万5千人もの人々がTOMODACHIイニシアチブに参加

し、支援していただきました。

また、米日カウンシルは年次総会を米国と日本で行うほか、議員同士の交流を地方や国レベルで手助けしています。米日カウンシルは、強い米日関係には地域同士の強いつながりが不可欠だと考えており、米日の州や県、市同士の繋がりを発展させ、相互に利益のある関係を作ってきました。その意味でも、今回石川県金沢市を訪れたことを大変嬉しく思い、今後も関係を築いていきたいと願っております。米日カウンシルは性別や地域、人種を超えた強いリーダーシップ・プログラムに関わってきました。

日系アメリカ人リーダーシップ・プログラムは、重要なリーダーシップ・プログラムの一つです。今年で17年を迎えるこのプログラムには、計200人近くの日系アメリカ人リーダーたちがアメリカ全土から参加してきました。毎年、代表団は日本のトップにいるリーダー―首相や外務大臣、企業の取締役に地方のトップ―と会うことができます。

本日ご参加いただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。実りある議論を楽しみにしています。

佐々木 雅幸 (文化庁 文化芸術創造都市振興室長／同志社大学 特別客員教授)



本日は、日本と米国におけるコミュニティの再生や活性化、文化、芸術を通じた取り組みについて、日米お互いの要素を話し合いたいと思っています。日本と米国は、長い付き合いの中で、コミュニティレベルで様々な信頼関係を結んでき

ました。日米の文化の違いを認め合いながら、相互に信頼関係を築いてきたように思います。文化の多様性を認めて初めて、平和や経済発展へ繋げることができるのです。お互いの国のリーダーの姿勢はもちろん重要ですが、コミュニティにおける人々の草の根的な盛り上がりの影響は極めて大きいと言えます。日本と米国はこれから新しい関係に向かうかもしれませんが、より一層、文化の多様性を認め、お互いの違いを違いとして認めながら、包摂的な社会を作る時代になるでしょう。

今回は、館長として日米文化会館を再生されたレスリー・イトーさん、マイアミ市議会で初めて日系人として当選されたケン・ラッセルさん、ニューヨークのコミュニティの発展のために活動されているウェンディ・タカヒサさんをお招きしています。このように、3つの異なる地域や立場で活躍されている方々と議論できることを、大変嬉しく思います。

“本日ここ金沢でコミュニティにおける文化活動やコミュニティの再生について議論することは、格別意味が深いと思っています。日本では、東京への一極集中がさらに強まり、東京から文化が発信されているように見えますが、実は、金沢は日本の奥深い文化を発信している場所だからです。”

また、本日ここ金沢でコミュニティにおける文化活動やコミュニティの再生について議論することは、格別意味が深いと思っています。日本では、東京への一極集中がさらに強まり、東京から文化が発信されているように見えますが、実は、金沢は日本の奥深い文化を発信している場所だからです。金沢は、京都のように歴史を大事にして発展してきた都市で、私も15年間、文化政策のお手伝いをしてきました。また、本日フロアにお越し頂いている金沢の山出前市長は、20年に渡ってこの街を文化都市として見事に発展させてくださいました。本日は、そんな金沢の地で、日本と米国のコミュニティにおける文化活動、あるいはコミュニティの再生に文化が果たす役割について、パネリスト発表やディスカッションが展開されることを大変楽しみにしています。

リトルトーキョーを持続可能な姿へ： 世代を超えた、コミュニティ主体のイニシアティブ

レスリー・イトー（日米文化会館（JACCC）館長 兼 CEO）



私は日系四世のアメリカ人です。母方の曾祖父が福岡からサンフランシスコに引っ越した1902年、私たち家族のアメリカでの歴史が始まりました。その後1942年には真珠湾攻撃があり、祖父母も含めたロサンゼルス日系アメリカ人が収容所に入れられました。祖父母にとっては、語るのも辛い経験だったのでしょうか。私の両親、つまり三世の世代には、収容所での経験を話さなかったようです。しかし、孫である私と妹には、戦時中の収容所に関するドキュメンタリーを見せてくれました。きっと、ドキュメンタリーという芸術文化を通してなら、辛い記憶も伝えることができたのだと思います。その時から私の使命は「芸術文化を通して、語られていない歴史を次の世代に伝えること」なのです。日米文化会館（JACCC）の館長になったのも、そのおかげだと思います。

JACCCは、一世や二世が日本や日系アメリカ人の芸術や文化を集め、多様なコミュニティの中心として作った場所です。アメリカではよく、プレイスパワー、プレイスメイキング、といった言葉が議論されますが、これも私が4年前にJACCCの館長になった理由の一つです。四世として、組織に関係のある、活気のある場所を守り続けることはとても大切だと思っているからです。JACCCには日本庭園、そして5階建てのオフィスがあります。リトルトーキョーには、130年間芸術と文化で栄えてきた、プレイスメイキングの歴史があります。これはもう、プレイスキッピングとも呼べるのではないかと思います。

リトルトーキョーにはロサンゼルス付近で2番目に長い、

134年のコミュニティの歴史があります。その分、脅威もたくさんありました。第二次世界大戦中の収容所ももちろんですが、政府や宅地開発業者による強制退去の危機が常にありました。一否、現在でもあります。リトルトーキョーの近くに、ロサンゼルスで2番目に大きな地下鉄の駅ができるというのです。地価は上がり、小事業や家族経営の会社は立ち退かなければならなくなりました。だから、JACCCは文化や歴史の維持の担い手として、裕福な人が快適に住めるだけでなく、多様な文化や年代の人々が「ここは自分の居場所だ」と感じられるようなリトルトーキョーにしたいのです。

リトルトーキョーやJACCCでは、人々とコミュニティや文化との繋がりを作り、関係性を成熟させる努力をしています。これは、私たちの核となるものです。現在も、戦時中の日系アメリカ人のような不当な目に合う人たちが出ないように、支援が必要な方と連帯や結束を作ろうとしています。

“JACCCは文化や歴史の維持の担い手として、裕福な人が快適に住めるだけでなく、多様な文化や年代の人々が「ここは自分の居場所だ」と感じられるようなリトル・トーキョーにしたいのです。”



緑化活動によるコミュニティ構築

ケン・ラッセル (マイアミ市議会 議員)

“この公園が火付け役となって、地域に明かりが灯り、人々が集まって公園を活用し、発展と創造力を促進して欲しいと思っています。”

私は1年前からマイアミ市議会議員をしていますが、その前はヨーヨープレイヤーとして生計を立てていました。両親も同じくプロのヨーヨープレイヤーでした。

今日は、緑地についてお話しします。私たち一家は、美しい緑地のある公園の前に住んでいます。しかし、受け入れがたいことに、その緑地は毒性物質に汚染されていました。そこで私は、市を説得して公園を適切に清掃してもらうためのコミュニティを作りました。これは成功に終わり、コミュニティに入った人々も満足でした。そして彼らは、私が選挙に出ることを勧めたのです。私自身も、草の根の活動家としてではなく、もっと大きな変化を作れる政治家として活動したいと思ったので、選挙活動を始めました。そして、マイアミ初の日系アメリカ人市議会議員に当選しました。

芸術や文化を通して緑地を活かす、3つの方法をご紹介します。すべてマイアミで今年、実際に行われたものです。1つ目は、既存の公園を再活性化することで、イチムラ・ガーデンがその例です。リコー三愛グループの創始者である市村清さんが、1957年にマイアミを訪れた際、美しい日



本庭園を造るための植物や彫像を寄贈してくれました。しかし時は経ち、イチムラ・ガーデンは10~15年にわたって荒廃していました。私たちは20万ドルかけて、この庭園を再活性化させました。現在では、「日本庭園の友達 (*the Friends of the Japanese Garden*) 」という団体が庭園の維持を手助けしています。

2つ目は、来月オープン予定のオムニ・パークです。発展していない貧しいスラム街にある荒れた空き地を活用し、公園を作ったのです。公園には誰でも無料で入れて、音楽が流れ、食べ物があり、スケート場もできる予定です。この公園が火付け役となって、地域に明かりが灯り、人々が集まって公園を活用し、発展と創造力を促進して欲しいと思っています。そして、近隣地域へも広がることを願っています。

3つ目は、つい最近完成した、ビスケイニングリーンです。マイアミにはもう緑地のための場所がありません。そこで私たちはマイアミで1番人の多い繁華街を選びました。この繁華街には8レーンある高速道路や巨大な駐車場があります。そこで駐車場をいくつかつぶし、高速道路のレーンを減らし、緑地に変えたのです。夜になれば公園には音楽が流れ、踊ることもできます。昼間はWi-Fiのあるワークプレイスや、ヨガなどのクラスも開かれます。これは、今までに繁華街にあったものとは大きく違いますが、人々は駐車場や交通を恋しがることなく、この施設にとっても満足しています。



文化とコミュニティ開発ーチェルシー地区を例に

ウェンディ・タカヒサ (モルガン・スタンレー社／コミュニティ・リレーションズ部取締役)



“私はコミュニティの重要性と社会的正義の必要性を強く感じて育ちました。”

私はニューヨークで生まれ育ちました。父はカリフォルニア生まれの二世で、母は東欧系のユダヤ人です。二人は第二次世界大戦後に結婚しました。異人種間の結婚だったうえ、片方が日系人だったということで、ひどい差別に苦しんだそうです。そのせいか、私はコミュニティの重要性と社会的正義の必要性を強く感じて育ちました。今日は、そんな私が日米の繋がりを強めるための、日系アメリカ人リーダー招へいプログラムに参加できることを大変嬉しく思います。

昨日は金沢市内の美術館を訪問させていただき、金沢21世紀美術館を訪れました。金沢大付属小中学校跡地に建てられたと聞き、私が24年間住んでいるチェルシーを思い出しました。

チェルシーもまた、廃墟や空きビルを改造した文化・美術関連の施設がたくさんあり、現在は観光地として栄えています。昔は貨物列車が通り、倉庫が立ち並ぶ工業地域でした。第二次世界大戦後には2,000ものアパートが建ち、団地ができました。しかし1960年代になると、大きな工業会社は店をたたんでしまい、空きビルだけが残りました。

そんなチェルシーで有名なのが、ジョイスシアターです。元々は映画館でしたが、1978年に閉鎖されてしまいました。そこに劇場を作ったのが、エリオット・フェルド・バレエです。ジョイスシアターは1982年非営利のダンス劇場としてオープンし、年に15万人以上もの人が訪れています。

1987年には、ディアセンターフォーアートができ、数多くのギャラリーがチェルシーに移転してきました。しかし、この地

域の地価が上がったことで、アートギャラリーは再び移出を迫られました。

1997年には、あのオレオクッキーが発明されたナビスコの工場跡地が、チェルシーマーケットに生まれ変わりました。35ものお店が入った、かなり大きな屋内フードホールで、年に600万人もの観光客を魅了しています。

もう一つ、かなり多くの観光客を集めているのは、ハイラインパークという空中公園です。元々は貨物列車の線路だったところを、美しい景色を一望できる散歩道や美術展覧会を行う公園に変えたのです。2014年には、2,000万人もの観光客が訪れています。

チェルシーのこのような発展がコミュニティに良い影響を与えたのは間違いありません。新しいマンションやレストランができました。観光業でも成功しています。しかし、良いことばかりではありません。再開発による高級化で、低所得層は生きにくくなってしまったのです。彼らの手が届いたはずのアパートや店は、大きな集合住宅群や100万ドルの分譲マンション、アートギャラリー、高級レストラン、私立の学校に変わっていています。アートギャラリーは無料ですが、低所得層は居心地が悪いと感じてしまいます。高級店では何も買うことができません。開発が進んでも、住民すべてのためにサービスや機会を維持していくことが大切なのです。

“開発が進んでも、住民すべてのためにサービスや機会を維持していくことが大切なのです。”



■ ディスカッションのコメント

福光 松太郎 (株式会社福光屋 代表取締役社長)



この金沢という街を少しご紹介することにいたします。幸いなことに、金沢は江戸時代より400年間変わらず、昔の地図のまま歩ける街です。戦後、昭和40年代にかけて、日本全国の地方都市を近代化し、活性化しようと大規模な

都市改革が実行されました。それは同時に、地方都市を均質化する流れでもありました。しかし、金沢は、周りの地方都市が近代化の恩恵を受け、大いに切り替わろうとしていた時に、何もせずに我慢をしていたのです。その時代の偉大な先輩方は、金沢で経済同友会を作り、「江戸からの文化がこれだけ残ったので、これをどのようにして大事にしていくなか、ということが金沢の街づくりだ」との考え方を確立しました。そして、市民と行政と一緒に、街づくりを進めるようになりました。江戸から受け継いできたものを変えないことや、変えないためにどれだけ新しいことをするか、という考え方が市民にも理解され、行政と市民との間で、意見の一致がなされていくようになりました。山出前市長がなされた多くの施策—具体的には金沢21世紀美術館や金沢芸術村など—も、その代表例だと言えます。

金沢は、創造的な街です。これは、理念的には、江戸時代の前田家が、当時前衛技術であった工芸をこの街の経営に活かして産業づくりをしようとした姿勢を、400年間守ってきたということです。2009年には、ユネスコのクリエイティブシティ（創造都市）、工芸分野第一号として登録されました。認定された最大の理由は、400年前から創

“400年の歴史の下、金沢が今後も創造都市であり続け、創造的な産業や街づくりを継続することにより、金沢という街の本質を変えないようにすること—この一見矛盾したような理念が、この街にとって非常に重要なのです。”

造都市であった、という論拠でした。金沢では、工芸を中心にして、革新的な産業活動と、創造的街づくりの連環ができ、今では狭義的な工芸を超え、工芸的な経営、工芸的なモノづくりが非常に盛んになりました。工芸的なモノづくりができる街となったことで、クリエイティブな人々がこの街に盛んに集まるようになりました。最近では、新幹線が金沢を通るようになったことで、実際に東京からクリエイティブな人々がこの街にオフィスやスタジオを移しています。金沢市からは、そのような方たちに補助をする施策を行っているところです。

400年の歴史の下、金沢が今後も創造都市であり続け、創造的な産業や街づくりを継続することにより、金沢という街の本質を変えないようにすること—この一見矛盾したような理念が、この街にとって非常に重要なのです。行政だけではなく、経済界や町衆などの市民が街づくりに携わることにより、この伝統的な理念が変わらないように、守りながら新しいものを創りだしているのです。これこそが、金沢の街づくりです。このような考え方が金沢のユニークなところであり—幸いなことに、400年間変わらざる街であることは感謝するしかありませんが—そのようなことを大切にしながら、今後も受け継いでいくことになるでしょう。

■会場 Q & A:

佐々木: パワー・オブ・プレイス一場所の持っている力があるか、今日の一つのキーワードではないかと思っパネリストの発表を聞いていました。ロサンゼルス代表とする西海岸は、多民族のコミュニティの力が経済発展を支え、さらにそのダイバーシティを支える寛容性があると感じています。その中で日系人の中心となる文化会館を再生されてきたというイトーさんの話は感動しました。マイアミのイチムラ庭園について、庭園には文化の重要な精神が形となって現われますが、ラッセルさんが、庭園という形で緑化活動と同時に文化活動を行われているのはイトーさんの話と繋がってくるのだと思います。それからチェルシーについて、私はジョイスシアターに行った事があり、非常に多様な方が集まっていたのを覚えています。リチャード・フロリダという学者は、高い寛容性がその場所を創造的にすると言っておりますが、チェルシーが本当にクリエイティブな場所であることが、話を聞いてよくわかりました。

フロアからの質問に移ります。日系人として、米国社会の中で上手くいくときもあれば苦勞することもあった。その中でどのように自文化のアイデンティティーを保ってきたか、複数の質問が寄せられています。

ラッセル: マイアミは日系アメリカ人が多く住む地域ではありませんが、自文化をどう保つかということについて、日系アメリカ人としての責任と絡めながらお話しします。現在のような排他的な風潮のある政治状況においては、大きな恐怖感が国を覆っています。こうした時代には、単に敵のように見えるだけの人が、実際に敵と見なされてしまうかもしれませんし、恐怖感

“恐怖によって当たり前のことわからなくなってしまうことがありますし、行動が変わってしまうこともあります。歴史はネガティブな形で繰り返すことがあります。私は日系アメリカ人としてそうならぬよう責任があると思いますし、歴史や経験を語り継いでいく必要があると感じています。”

が普段の行動を変えてしまうかもしれないのです。言うまでもなく、第二次世界大戦に際し日系アメリカ人に起こったことについて話しているのですが、日系アメリカ人は、現在のこうした状況でも、敵のように見えるだけでは敵であることを意味しない、そう考えることは誤りであるとはっきり言う責任があります。

恐怖によって当たり前のことわからなくなってしまうことがありますし、行動が変わってしまうこともあります。歴史はネガティブな形で繰り返すことがあります。私は日系アメリカ人としてそうならぬよう責任があると思いますし、歴史や経験を語り継いでいく必要があると感じています。

ヒラノ: 2017年はフランクリン・ルーズベルト大統領による大統領令9066が施行されてから75年となります。この大統領令により12万もの日系アメリカ人が強制収容所に送り込まれることになりました。いくつかのミュージアムで回顧する展示・イベントも行われていますが、米国が現在のような状況のときに、75年前の大統領の署名により何が起こったのかを日系アメリカ人が語り知らしめていくことはとても重要なことです。



ヒラノ: 先ほど佐々木先生のお話に場所の力というのがありました。SNSがここ何年かで非常に浸透してきたことによって、多くの人たちは自分がパソコンの前に座っているだけで、わざわざ物理的に出かけなくても世界を分かったような気になりがちです。こうした状況において、実際に物理的に人を引き寄せるような文化芸術の場をつくることはどのような意味を持つのでしょうか。

“人の繋がりというのは非常に大事だと思っています。これは常に立ち戻らなければいけませんし、今回の日系アメリカ人リーダーシップ招へいプログラムそのものが持っている価値でもあります。”

イトー: 人の繋がりというのは非常に大事だと思っています。これは常に立ち戻らなければいけませんし、今回の日系アメ

リカ人リーダーシップ招へいプログラムそのものが持っている価値でもあります。人と人との交流、そして出会いというものを促していくこと、もちろんフェイスブックとかインスタグラムもあってそこで繋がる事は出来ますが、やはり顔を合わせての出会い、交流というのには勝てないわけです。

タカヒサ:簡単なストーリーなんですけれども、最後に紹介したハイラインパークがオープンした時に私の娘は11歳でした。当時彼女は携帯電話で話をする事や、パソコンに向かっていくことだけが唯一の楽しみでしたが、この公園がオープンした日に実際に行き、非常に感動していました。私はその日仕事から帰ると、「お母さん、ハイラインパークに連れて行ってあげようか」と言うほどでした。このハイラインパークが出来たことはやはり大きな違いを場にもたらしたと思います。ヘッドフォンで音楽をめいめい聴くような感じではなく、多くの人たちが笑顔でお互い挨拶を交わしていましたし、チェルシーにコミュニティ意識を醸成してくれました。これは非常に特別なことです。

佐々木:山出前市長に特別にお話をいただきたいと思います。

山出:アメリカから多くのお客様にお越し頂き大変嬉しく思います。ウェンディさんのお話の中に、歩ける街づくりが大事だとありましたが、私も実は同感であります。歩く中から街と人への親しみを感じ、優しいコミュニケーションが生まれてくるわけですので、歩けるということを大切にしたいと思うし、いま日本の社会で一番大事なことだと思っています。金沢という街は福光さんのお話にありましたが、400年間戦争がありませんでした。戦争の体験のない平和都市であります。戦争がなかったから古い雰囲気や伝統文化が残りました。これらは絶対に大切にしたい金沢の個性であり、魅力です。戦争が済んで70年が経ちましたけど、日本の都市状況は画一化し、均質化しました。しかし、街というのは顔がなければなりませんし、顔が見えなければいけない。顔が見えるから、よそと違うオーラが生まれますし、交流が出来る、そして交流の中から私は平和が生まれてくると思っています。金沢は一度だけ来てすべてが分かるわけではありませぬので、ぜひまたお越しいただきたいと

“街というのは顔がなければなりませんし、顔が見えなければいけない。顔が見えるから、よそと違うオーラが生まれますし、交流が出来る、そして交流の中から私は平和が生まれてくると思っています。”

思います。

佐々木:最後に登壇者の皆様から一言ずつメッセージをお願いします。

福光:市民がこの街の暮らしに誇りが持てる街をずっと続けていかなければならないと、前市長の顔を見る度にそのように思います。この思いは本日、様々な例を出していただいたパネリストの皆さまの街でも全く同じだと思うので、一緒になって今後とも交流出来たら素晴らしいと思います。

イトー:ロサンゼルスのリトルトーキョーで見してきたこと、そして金沢で見たことを考えると、市民であろうと、政府・企業であろうと、私たちは歴史を学び、そして自分たちの文化を次世代の為にどう守っていくのかを考えなければなりませんと思います。

ラッセル:私はこの街に来て2日だけですが、金沢の街に非常に感動しました。そしてこの街をうらやましく思います。歴史への誇りや文化芸術への愛着が、建造物にあるのではなく、金沢市民に根付いています。私は金沢で出会った方々からそのような感じました。ここで学んだことをマイアミに持ち帰りたいと思います。

タカヒサ:金沢に来て本当に多くの事を学びました。伝統を尊重しながら、新しいものをどう生み出していくのか、そしてそのバランスをどうとるのか。他のところと比べても金沢市は上手にそれを実現していると思います。どこに行っても、新しいものを革新的に生み出しながら古いものも大事にしている。その意味で特別な場所だと思います。

ヒラノ:今回金沢を訪れるのは初めてで、非常に楽しみにしていました。金沢で出会った方々は素晴らしい金沢のお話を共有してくれました。そして、代表団のパネリストもそれぞれの経験を共有できたのではないかと思います。この場に集まってくださった方々に米日カウンシルを代表して改めて御礼申し上げます。



The Japanese American Leadership Symposium is organized by the Japan Foundation Center for Global Partnership (CGP) as part of a project sponsored by the Ministry of Foreign Affairs: the Japanese American Leadership Delegation (JALD) Program.

The theme this year is “Culture and Community Engagement: A Japanese American perspective”. The panelists, who are Japanese American leaders, share their experience in community engagement, and exchange ideas on the potential impact of cultural activities.

Culture and Community Engagement: A Japanese American Perspective

Presentations

Panelists

● **Leslie A. Ito**

President & CEO, Japanese American Cultural & Community Center

**“Sustainable Little Tokyo:
A Multi-Generational, Community-Driven Initiative”**

● **Ken Russell**

Commissioner, City of Miami

“Community Development Through Green Space”

● **Wendy Takahisa**

Executive Director, Office of Community Relations, Morgan Stanley

“Culture and Community Development”

Discussant

● **Matsutaro Fukumitsu**

President, Fukumitsuya Sake Brewery

Moderators

● **Masayuki Sasaki**

General Manager, Office for Promotion of the Creative City, Agency for Cultural Affairs

Distinguished Professor at Doshisha University

● **Irene Hirano Inouye**

President, U.S.-Japan Council

Discussions

• Panel Discussion • Q&A

Panelists



Leslie A. Ito

President & CEO, Japanese American Cultural & Community Center

Founded in 1971, JACCC is one of the largest ethnic arts and cultural centers of its kind in the United States. Previously, Ms. Ito was Program Director for Arts and Health at the California Community Foundation, and Director of Grant Programs at the Los Angeles County Arts Commission. She has also served as Executive Director of Visual Communications, the nation's premiere Asian American media arts organization, and as Program Associate in the Media, Arts Culture Division at the Ford Foundation in New York. Ms. Ito served on the Board of Directors for Americans for the Arts, TELIC Arts Exchange in Los Angeles' Chinatown and Films By Youth Inside (FYI Films), inspiring incarcerated youth through filmmaking. She is also a co-founder of the Los Angeles Asian American and Pacific Islander Giving Circle.



Ken Russell

Commissioner, City of Miami

Mr. Ken Russell was elected Commissioner of Miami's District 2 in November 2015. He soon became the Vice Chair of the City Commission and the Chairman of the Downtown Development Authority, the Coconut Grove Business Improvement District, and the Omni Community Redevelopment Agency. His priorities include transit solutions, smart development, homelessness, green space, and affordable housing initiatives. Mr. Russell has begun work with Consul General Ken Okaniwa to restore Miami's Ichimura Japanese Gardens. He has conducted business in over 40 countries and founded several charitable startup paddleboard events. He spent many years as a professional yo-yo player, a skill learned from his mother, one of Japan's greatest yo-yo players. Mr. Russell received a Bachelor of Science degree in Business Administration from the University of North Carolina at Chapel Hill, and studied International Business at Kwansai Gakuin Daigaku in Nishinomiya.



Wendy Takahisa

Executive Director, Office of Community Relations, Morgan Stanley

Ms. Wendy Takahisa is Executive Director, Office of Community Relations at Morgan Stanley in New York. There, she works to position Morgan Stanley as a leader in community development, managing relations with community groups, regulators and other stakeholders to understand and respond to community needs. For much of the past 30 years, her career has focused on ensuring that banks provide services to low- and moderate-income neighborhoods and people. Previously, Ms. Takahisa held several positions over 20 years with Citigroup, including Managing Director, Global Compliance Programs. She has been on the Board of Directors of Asian Americans for Equality (AAFE) for more than 20 years, and served as President of the Board of Directors for over 12 years. AAFE is a nonprofit organization dedicated to enriching the lives of Asian Americans and all of those in need. She is also an active member of the New York Japanese American community, participating with organizations such as the Japanese American Association of New York, Japanese Americans and Japanese in America, and the Japanese American Citizens League.

Discussant



Matsutaro Fukumitsu

President, Fukumitsuya Sake Brewery

Mr. Matsutaro Fukumitsu was born in Kanazawa city. He is the 13th president of Fukumitsuya Sake Brewery, which was founded in 1625. He graduated from Keio Business School after receiving his BA from the Department of Economics, Keio University. Mr. Fukumitsu became the President of Fukumitsuya in 1985, and has been implementing various projects that introduce new ways to enjoy Japanese Sake in daily lives. He opened a restaurant in Tokyo, which is now known for receiving a Michelin Star. He is a supervisor of the Japanese Sake and Shochu Makers Association, director of the Kanazawa Craftwork Business Creation Agency, as well as a board member of the Japan Institute of Design Promotion. He has received numerous awards, including the Kanazawa Cultural Activities Award (1999), the Ishikawa Design award (2001), and Medal with Blue Ribbon from the Japanese Government.

Moderators



Masayuki Sasaki

General Manager, Office for Promotion of the Creative City, Agency for Cultural Affairs
Distinguished Professor, Doshisha University

Dr. Masayuki Sasaki is a Distinguished Professor in the Department of Economics, Doshisha University. He is also an Emeritus Professor at Osaka City University. Dr. Sasaki received his Ph.D in Economics from Kyoto University, as well as his MA and BA. Before assuming his current position at Doshisha University, Dr. Sasaki taught Economics at

the Osaka University of Economics and Law, Kanazawa University, Ritsumeikan University and Osaka City University. He was also a visiting researcher at University of Bologna in Italy. His research focuses on creative cities, creative economy, cultural economics and urban economics. His works include: "Urban Regeneration through Cultural Creativity and Social Inclusion: Rethinking Creative City theory through a Japanese Case Study" (2010) and "Creative Cities of the 21st Century: Their Diversity and Network" (2016).

He is also a General Manager of Office for Promotion of the Creative City at Agency for Cultural Affairs.



Irene Hirano Inouye

President, U.S.-Japan Council

Ms. Irene Hirano Inouye is President of the U.S.-Japan Council, a non-profit organization headquartered in Washington, D.C., dedicated to building people-to-people relationships between the United States and Japan. She is the former President and founding CEO of the Japanese American National Museum in Los Angeles, a position she held for twenty years. A recipient of bachelor's and master's degrees in Public Administration from the University

of Southern California, Ms. Hirano Inouye has extensive experience in nonprofit administration, community education and public affairs with culturally diverse communities nationwide. Ms. Hirano Inouye's professional and community activities include serving as Trustee and immediate past chair, Ford Foundation, Trustee and immediate past chair, Kresge Foundation; Trustee, National Trust for Historic Preservation, Trustee, Washington Center, and Trustee, Independent Sector. She was married to the late Senator Daniel K. Inouye of Hawaii.

Remarks by Representatives of the Host Organizations



Junichi Chano (Executive Director, The Japan Foundation Center for Global Partnership)

The Center for Global Partnership (CGP) was established within the Japan Foundation in 1991 to promote cooperation between Japan and the United States and leverage the wisdom of the two countries with a vision to address policy issues

facing contemporary society. Over the past quarter of a century, the CGP has focused on a wide range of international issues through a bilateral intellectual exchange framework, and at the same time worked to build stronger and closer ties between the two countries.

The Japanese American Leadership Symposium, organized by the U.S.-Japan Council and the Center for Global Partnership, is part of the Japanese American Leadership Delegation Program sponsored by the Ministry of Foreign Affairs. This year marks the 17th year of the program and this is the first time the program has taken place in Kanazawa.

Today's discussion will focus on the role of culture in community development. Although we hear about Japan's local

communities losing their vitality in recent years, Kanazawa has certainly proved an exception. Drawing upon the city's cultural resources developed over its long history, as well as modern elements such as contemporary art, Kanazawa has consistently reinvented itself with a clear vision for the future. The symposium aims to approach the theme of culture and community development by learning from the successes of Kanazawa, a member of UNESCO's Creative Cities Network, drawing comparisons with the experiences of cities in the United States, and reflecting on the insights and perspectives offered by Japanese American leaders.

Mindful of the increasingly complex global debate on the topics of immigration and social integration, the conference will also address the challenges of promoting diversity and inclusion in community development efforts. Together with our audience, we hope to explore the lessons that can be learned from the experiences of the Japanese American communities.

Finally, this symposium has received generous support from both the Ministry of Foreign Affairs and Ishikawa Prefectural Government, with which the Japan Foundation has a partnership agreement. I would like to extend my heartfelt thanks to everyone who made this event possible. Thank you.



Irene Hirano Inouye (President, U.S.-Japan Council)

The U.S.-Japan Council is a nonprofit organization that is headquartered in Washington D.C. with offices in Los Angeles and in Tokyo. The U.S.-Japan Council's mission is to develop strong people-to-people relationships between the U.S. and Japan

at the government, business, and civil society levels. Through a variety of educational programs, the U.S.-Japan Council works with a diverse range of American and Japanese leaders.

One of the major programs of the U.S.-Japan Council is the TOMODACHI Initiative. Following the Great East Japan Earthquake, the U.S.-Japan Council was asked by the U.S. Embassy to create and administer the TOMODACHI Initiative, a public-private partnership working with the U.S. Embassy, with support from the Japanese government. The initiative invests in the next generation of Japanese and American leaders through educational and cultural exchanges as well as leadership programs. In total, there have been nearly 35,000 people that have participated in and supported the TOMODACHI Initiative.

The U.S.-Japan Council holds an annual conference both in Japan and in the U.S. The Council facilitates exchanges between elected officials in the U.S. and Japan at the local state and national levels. The U.S.-Japan Council believes that a strong U.S.-Japan partnership must include strong regional relationships, and so we developed ties between Japanese prefectures and states and cities in the U.S. and Japan to build mutually beneficial connections across our two countries. We were so pleased to visit Ishikawa prefecture and the City of Kanazawa on this trip, and we hope that we can continue to build relationships. The U.S.-Japan Council is committed to offering strong leadership programs across generations, regions, gender and ethnicities.

The Japanese American Leadership Delegation Program is one of our key leadership programs. This is the 17th year of the program, and nearly 200 Japanese American leaders from throughout the U.S. have participated so far. Each year the delegation meets with top Japanese leaders, including the Prime Minister, the Foreign Minister, corporate CEOs and, like today, regional leaders.

Thank you for joining us today. We look forward to a productive exchange of ideas.

Initial Moderator Comments

Masayuki Sasaki (General Manager, Office for Promotion of the Creative City, Agency for Cultural Affairs/Distinguished Professor, Doshisha University)



Today's discussions will focus on Japanese and American efforts to develop and revitalize communities using culture and arts. Over the many years, Japan and the United States have forged a warm relationship of trust at the community level,

made possible through the recognition and acceptance of each other's cultural differences. Acknowledging cultural diversity is the first step towards peace and economic development. Needless to say, the inclinations of our leaders are important in building good relations, but so are friendship and lively exchanges at the grass-roots levels. Japan-U.S. relations may be heading for a new stage, but I am certain we will be entering the era of a more inclusive society open to diversity and differences.

This year's symposium welcomes as panelists Leslie A. Ito, President of the Japanese American Cultural and Community Center who has played a key role in reviving the center; Ken Russell, the first Japanese-American commissioner for the City of Miami; and Wendy Takahisa, who works on community relations in New York. We are delighted for this opportunity to exchange views with such leaders representing three different professional positions and geographic locations.

I would also like to emphasize the significance of

“I would also like to emphasize the significance of discussing community-based cultural activities and community revitalization here in Kanazawa. With Tokyo's dominance over other Japanese cities growing ever greater, one might conclude that the capital is Japan's sole center of culture. But the truth is, Kanazawa City is also a major source of deep Japanese culture.”

discussing community-based cultural activities and community revitalization here in Kanazawa. With Tokyo's dominance over other Japanese cities growing ever greater, one might conclude that the capital is Japan's sole center of culture. But the truth is, Kanazawa City is also a major source of deep Japanese culture. Like Kyoto, Kanazawa has developed while embracing its history, and I have had the real pleasure of being involved in the city's cultural programs over the past 15 years. Former Kanazawa Mayor Tamotsu Yamade, who is here in attendance, is credited with transforming Kanazawa during his two-decade tenure as mayor into the thriving cultural city that we see today. So it is truly a pleasure to be gathered in Kanazawa today, and I sincerely look forward to the panelists' presentations as well as the discussion sessions on community-based cultural activities and the role of culture in community revitalization in Japan and the United States.

Sustainable Little Tokyo: A Multi-Generational, Community-Driven Initiative

Leslie A. Ito (President & CEO, Japanese American Cultural & Community Center)



I am Yonsei, and my family story in the U.S. started when my maternal great grandfather came from Fukuoka to San Francisco in 1902. In 1942, when Pearl Harbor was attacked, my family and Japanese American community in Los Angeles and on the West Coast were imprisoned by American government in internment camps. They were forced to give up everything. It was very painful for my grandparents to talk about that experience later, and I don't think they ever shared it with my parents. But they did take my sister and me to see a documentary about the internment camps. I think it was through arts and culture that they were able to share their painful history. So it has become my life's work to tell untold stories, like my grandparents did, for my children and future generations through arts and culture. And that's why I joined the Japanese American Culture and Community Center (JACCC) as the President and CEO.

The JACCC was founded in 1971 by Issei and Nisei community leaders as a hub for Japanese and Japanese American arts and culture, and as a place for diverse voices to gather. In the United States, we talk a lot about the power of place and "place making." This led me to join JACCC four years ago. As a Yonsei, I felt that it was really important for us to fight as hard as we could to protect the physical space to ensure the vibrancy and relevance of the organization. We have a Japanese garden and a five-story office building. Little Tokyo has been flourishing in arts and culture for a very long time, actually over 130 years. So we like to say that in Little Tokyo, we are "place keeping" instead of "place making."

Little Tokyo is 134 years old, the second oldest neighborhood in Los Angeles. So there have been many historical threats to Little Tokyo. Not only the World War II evacuation but also the continuous threats of displacement

by the government and private developers, both historically and currently. For example, the second busiest metro station in LA is now being built. This causes an increase in real estate price, which forces many of the small businesses and family businesses out of the neighborhood. We are a hub for cultural and historic sustainability, and we want to ensure that many multicultural and multigenerational people, not just wealthy people, can enjoy and appreciate Little Tokyo as their community. We also work towards economic and environmental sustainability, because arts and culture stimulate economy, and our environmental actions affect our future generations.

In the end, connecting people with community and culture, and nurturing and cultivating relationships, are at the heart of our efforts in Little Tokyo and JACCC. We want to build coalitions and stand in solidarity with those who need our support, so that others do not face the same kinds of injustices that Japanese Americans faced during World War II.

"We are a hub for cultural and historic sustainability, and we want to ensure that many multicultural and multigenerational people, not just wealthy people, can enjoy and appreciate Little Tokyo as their community."



Community Development Through Green Space

Ken Russell (Commissioner, City of Miami)

“We built a park, hoping that it will be the initial spark that brings people together and encourages development and creativity.”

I have been a Commissioner for the City of Miami for a year. Before that, I was a professional Yo-Yo player, as both of my parents were.

I am here to talk about green space and how to activate them through arts and culture to develop a community. I live with my family in front of a park, which is a very beautiful green space. However, we learned that it was contaminated with poisonous elements, and for me this was unacceptable. So I worked with the community to convince the city to clean up the park. We were so successful and everyone was so happy with the result, that they told me I should join politics. I wanted to make an impact, not in activism but in politics, where I felt I could make the greatest difference. I began a campaign to become a City Commissioner, and I became Miami’s very first Japanese American elected official.

I’d like to name three different examples from this past year, where we created green space in Miami and activated them with arts and culture. The first way is renew an old park, and we did that with the Ichimura Garden. Mr. Kiyoshi Ichimura, the founder of Ricoh Corporation, visited Miami in 1957 and donated



plants and sculptures to create a beautiful Japanese garden. However, the garden has not been kept very well, and has been in poor condition for the last 10 to 15 years. We’ve allocated \$200,000 for the design and planning to bring this garden back to life. Now, a group called the Friends of the Japanese Garden helps to maintain the garden.

The second one is a park called Omni Park, which is opening next month. We built a park in an empty space, an area of poverty with no development. We hope that this will be the initial spark that brings people together and encourages development and creativity. This park will be free for anyone to come to, and there will be music, food vendors, and even a skatepark. We are hoping that this will help develop and revitalize that neighborhood.

The last example is a project we just completed, called Biscayne Green. Miami doesn’t have much green space left, so we have to get creative to take it back from the city. We took the busiest section of downtown Miami, which has an eight-lane highway with a massive parking lot in the middle, and converted that into an active green space. At night the park offers music and dance performances, and during the day it provides workspace with WiFi and yoga classes. This is something that has never been seen in downtown Miami. We don’t miss the parking, and we don’t miss the traffic. We are very happy to have this amenity.



Culture and Community Development

Wendy Takahisa (Executive Director, Office of Community Relations, Morgan Stanley)



“I was raised with a strong sense of community and the need for social justice.”

I was born and raised in New York City. My father was a Nisei born in California, and my mother was a Jewish person of Eastern European descent. They married just after World War II ended. As an interracial couple, particularly one that included a Japanese American, they suffered tremendous discrimination. I was raised with a strong sense of community and the need for social justice. So I am very pleased to be a part of this Japanese American Leadership Delegation that is seeking to strengthen ties between the U.S. and Japan.

Yesterday, we visited museums in Kanazawa, and I learned that the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa is located where the elementary school and junior high school affiliated with Kanazawa University used to be. This reminds me of Chelsea, where I've lived for the last 24 years.

Today, due to numerous new arts organizations replacing vacant buildings, Chelsea is a tourist mecca. Historically, however, Chelsea was an industrial neighborhood with freight lines, warehouses and passenger shipping. After World War II, three large public housing complexes were built, with 2,000 apartments in total. By the 1960s, many large industrial companies had closed, leaving large vacant buildings.

The first major arts institution to open in Chelsea was the Joyce Theatre for Dance. The building had previously housed the Elgin Movie Theatre. The Elgin was famous for cult films, revivals and midnight movies, but closed in 1978. In 1982, the Eliot Feld Ballet restored the building and opened a non-profit organization, the Joyce Theatre for Dance. Today, more than 150,000 people

come to the Joyce each year.

In 1987, Dia, which helps artists achieve visionary projects, was founded, and many art galleries began moving into Chelsea. However, as the neighborhood improved and rents rose, many art galleries were forced to move out.

In 1997, a former Nabisco factory, where the Oreo cookie was invented, was transformed into Chelsea Market, one of the greatest indoor food halls, with 35 vendors that attract 6 million tourists annually.

The most impressive transformation in Chelsea may be High Line Park. An abandoned former freight train line has been transformed into the High Line Park, which has a walkway with beautiful landscaping, seating areas and art exhibitions. In 2014, it attracted more than 20 million visitors.

These developments have significantly improved the community. New apartment buildings, shops and restaurants have opened. Tourism is up significantly. However, there is a darker side to this revitalization: gentrification. These developments have also created tensions for long-term, lower-income residents. There are now million dollar condominiums, art galleries, expensive restaurants and an exclusive private school. While the art galleries are free, many low-income residents do not feel welcome at the art galleries, and cannot afford to shop at the new retail stores, which have frequently replaced more affordable options. For the community to welcome everyone, it is important to maintain services and opportunities for residents at all income levels.

“For the community to welcome everyone, it is important to maintain services and opportunities for residents at all income levels.”



Discussant Comments

Matsutaro Fukumitsu (President, Fukumitsuya Sake Brewery)



Let me take this opportunity to offer a brief introduction to Kanazawa. In a stroke of good luck, the Kanazawa cityscape has not changed since the premodern Edo period. You could open a map drawn four centuries ago and walk the streets perfectly well today. In the decades after the

Second World War up to the 1970s, large-scale reforms were instituted to modernize and revitalize local cities across Japan. The move also gave rise to the homogeneity of these cities. But while our neighbors enjoyed the benefits of modernization and geared up for dramatic change, Kanazawa remained patient and did nothing. Our wise leaders of the day formed the Kanazawa Association of Corporate Executives and established our unique style of community development that cherishes and grows the numerous remnants of Edo culture. This idea of preserving our Edo heritage, and of incorporating the new for the purpose of sustaining the old, struck a chord with the citizenry and laid the foundation for community development activities agreed upon and carried out hand in hand by government and citizens. The former mayor of Kanazawa, Mr. Tamotsu Yamade, kept up this practice and promoted many policies that serve as excellent examples, namely the 21st Century Museum of Contemporary Art and the Kanazawa Citizens' Art Center.

Kanazawa is a creative city. This concept can be traced back to the Maeda clan, which ruled the area starting in the late 16th century, and in doing so embarked to build an industry around the pioneering craft techniques of the time. That Kanazawa upheld this approach for four centuries became the primary basis for its designation, in 2009, as a member of the UNESCO Creative Cities Network—the first under the crafts and folk art category. Kanazawa is a city

“Kanazawa hopes to maintain its status of four centuries and continue to be a creative city. We aspire to forever promote creative industry and creative community development, and by doing so, preserve the essence of the city. The seemingly contradictory cause and effect is very important for us.”

capable of drawing on the crafts to link innovative industrial activity with creative community development. Today our definition of “craftsmanship” has broadened to include the flourishing practices of creative business administration and creative production work. And the city’s openness to creative production processes continues to attract creative minds. Recently, with the extension of the Shinkansen bullet train to Kanazawa, creative people from Tokyo are actually relocating their offices and studios here. The city government has set up a subsidy system to support these businesses.

Kanazawa hopes to maintain its status of four centuries and continue to be a creative city. We aspire to forever promote creative industry and creative community development, and by doing so, preserve the essence of the city. The seemingly contradictory cause and effect is very important for us. Here in Kanazawa, not only the government but also the citizenry, including businesses and local leaders, engage in community development so that we may protect our traditional approach. We keep alive the idea of incorporating the new for the purpose of sustaining the old. This is our unique style of community development. As I said in the beginning, the Kanazawa cityscape has not changed for 400 years. This is indeed a stroke of good luck, a symbol of the heritage we hold dear and seek to pass down for all time.

Q&A with the Panelists

Sasaki: The power of place—this was a key phrase that I picked up from the presentations given by the panelists today. In Los Angeles, as well as the rest of the West Coast, the strength of multi-ethnic communities supports economic development, and this, in turn, has led to the nurturing of tolerance for diversity. I was moved by Ms. Leslie Ito’s discussion on the founding of the JACCC as a hub for Japanese Americans against the backdrop of postwar redevelopment. In Miami, the Ichimura Garden gives shape to the quintessential spirit of Japanese culture. Mr. Ken Russell has revitalized this garden as both a green space and a place for cultural activities. I think this connects with Ms. Ito’s story. As for the Chelsea neighborhood of New York, I have been to the Joyce Theater, and I remember noticing a very diverse spectrum of people. The scholar Richard Florida says tolerance makes a place creative, and I saw clearly from Ms. Wendy Takahisa’s presentation that Chelsea is a really creative place.

Let’s move on to questions from the audience. We have a number of questions that are similar in nature. That is, Japanese Americans have at times gotten along well with other Americans and at other times had difficulties. Through it all, how do you maintain your cultural identity?

“Fear can take away logic, and fear like that can change our behavior. We could repeat the past in a negative way. So I feel that as a Japanese American, I have the responsibility to bring forth the story about my past and culture.”

Russell: Since there aren’t many fellow Japanese Americans in Miami, for me it’s not so much about how I retain my cultural background but about what my responsibilities are as a Japanese American. The United States is currently enveloped in a great sense of fear. We are at a time where we see people who might look like the enemy and feel that they could actually be the enemy. And that sense of fear tends to change your behavior. Of course I am speaking about what Japanese Americans faced during World War II. I feel that Japanese Americans today are at a critical point where we have the responsibility to say, “no—just because you look like the enemy does not mean you are the enemy.” Fear can take away logic, and fear like that can change our behavior. We could repeat the past in a negative way. So I feel that as a Japanese American, I have the responsibility to bring forth the story about my past and culture.

Hirano Inouye: This year, 2017, marks the 75th anniversary of the signing of Executive Order 9066 by then President Franklin D. Roosevelt, which resulted in the incarceration of 120,000 Japanese Americans. Several museums in the United States have organized exhibitions and events to commemorate the signing of the executive order. This is a time when it is very important for Japanese Americans to share the stories of what happened as a result.



Hirano Inouye: Earlier, Dr. Sasaki talked about the power of place. With the rise of social media in recent years, people often feel that they can understand the world by simply sitting in front of the computer, without going out and visiting any actual place in person. So why is it important that we continue to invest in places and bring people together through culture and the arts?

Ito: I think human connection is very important, and something that we need to return to. This value is actually the foundation of the Japanese American Leadership Delegation Program. We are here to connect people and build people-and-people relationships. Maybe we could have connected via Facebook or Instagram, but it isn’t the same. The question is how we use social media to drive people to make contact—real human-to-human contact.

“I think human connection is very important, and something that we need to return to. This value is actually the foundation of the Japanese American Leadership Delegation Program.”

Takahisa: I can tell you one very quick story. The last example I gave in my presentation was the High Line. When this park opened, my daughter was 11 years old. At the time, she was only interested in chatting on her cell phone and being on her computer. But she went to the park on the day it opened, and she was so moved by the experience that when I got home from work, she said, “Mom, can I take you to the park?” This brand new park made a very big difference in our neighborhood. The first time we walked through it, I was struck by the fact that nobody had their headphones on, and everybody was just smiling and greeting each other. The park created a sense of community in Chelsea, and this is very special.

Sasaki: This is a good time to ask for a special comment from Mr. Tamotsu Yamade, the former mayor of Kanazawa.

Yamade: It’s a great pleasure to welcome so many distinguished guests from the United States to Kanazawa. Ms. Wendy Takahisa talked about the importance of community spaces made for walking. I agree completely. Space to walk is important because the act of walking within one’s community allows people to feel connected to their communities. I think we need to value this physical act of walking; it is something that Japanese society needs most right now. As Mr. Fukumitsu said, Kanazawa has not known war for the past four centuries. The city has no experience of war. We know only peace. Thanks to the absence of war, the old atmosphere and traditional culture remain, and these make up the character and attraction of Kanazawa that are absolutely worth cherishing. In the 70 years since the conclusion of World War II, cities across Japan have undergone a process of standardization and homogenization. But each city should have its own face, its own clearly visible character. This visible character is what creates a distinct aura unlike any other place. It’s what makes people-to-people exchange possible, and I believe this exchange is what leads to peace. There is so much in Kanazawa, that you can’t ever discover it all in a single trip. I hope you will pay us a visit again.

“Each city should have its own face, its own clearly visible character. This visible character is what creates a distinct aura unlike any other place. It’s what makes people-to-people exchange possible, and I believe this exchange is what leads to peace.”

Sasaki: In closing, let’s ask for one last remark from each of our speakers, please.

Fukumitsu: Every time I see former Mayor Yamade, I’m inspired to continue developing the city of Kanazawa and making the residents proud of living here. Perhaps each of the panelists feels exactly the same way, as we saw from the various examples of their own city. I hope we can keep our connection alive and continue exchanging our thoughts about our communities.

Ito: Everything I have seen in Los Angeles’s Little Tokyo and here in Kanazawa tells me that no matter where you sit, whether you are a citizen or part of the government or private businesses, we all have a part in both recognizing history and thinking about how we can protect our cultural heritage for future generations.

Russell: It’s been only two days since I arrived in Kanazawa, but this city has left a strong impression on me. In fact, I am envious of this city and the way you have such pride in your history and cherish your arts and culture. And it’s not just the buildings. It’s the citizens. Everywhere I go, the people have shown love and joy for this special place. I hope to take what I’ve learned here and share it back home in Miami.

Takahisa: I, too, learned a lot in Kanazawa—how you respect old traditions while you create new traditions, and how you maintain that balance. I think in Kanazawa, I’ve seen the best examples of that anywhere. Every person we met here go shared the idea of respecting the old while creating the new. Kanazawa should be very proud of this heritage; it is very special.

Hirano Inouye: I had never been to Kanazawa before, so I was really looking forward to coming here. Everyone we met shared wonderful stories about Kanazawa, and each of the panelists in our delegation also shared their experiences. I thank you for spending the evening with us, and on behalf of the U.S.-Japan Council, again, thank you very much.



パネリスト以外の訪日メンバー Other Delegation Members



デビッド・ブーン
David Boone
CB&I Federal Services 社長
President
CB&I Federal Services



ジェーソン・フジモト
Jason Fujimoto
HPM Building Supply 社長
兼 最高執行責任者
President & COO
HPM Building Supply



サワコ・ガードナー
Sawako Gardner
ニューハンプシャー州
ポーツマス地方裁判所 判事
Portsmouth District Court
State of New Hampshire



ロイ・ヒラバヤシ
Roy Hirabayashi
サンノゼ太鼓 共同創業者
Co-Founder and past Executive Director
San Jose Taiko



パトリック・オオイシ
Patrick Oishi
ワシントン州キング郡
高等裁判所 判事
Judge
King County Superior Court



リン・ナカモト
Lynn Nakamoto
オレゴン州最高裁 判事
Associate Justice
Oregon Supreme Court



マイケル・タカダ
Michael Takada
シカゴ定住者会 (JASC) CEO
Chief Executive Officer
Japanese American Service Committee



ゲーリー・ヤマシタ
Gary Yamashita
サクラスクエア CEO
Chief Executive Officer
Sakura Square

日本滞在中の様子 Scenes from Visit



シンポジウム実績 Past Symposia

実施年 Year	実施場所および共催団体 Venue / Co-sponsor	テーマ Theme
2003	東京／なし Tokyo	日系人コミュニティから見た現代アメリカ社会と市民活動 Contemporary Society and Civil Society in the United States: Through the Eyes of the Japanese American Community
2004	京都／なし Kyoto	アジア系アメリカ人の多様性：連帯に向けて Asian American Diversity: Building Coalitions
2005	神戸／(財)兵庫県国際交流協会 Kobe /Hyogo International Association	多文化共生実現への道：マイノリティの視点から Practicing Multicultural Coexistence: From Minorities' Perspectives
2006	名古屋／(財)名古屋国際センター Nagoya /Nagoya International Center	芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献 From Art to Business: Japanese Americans in the Professional Arena
2007	広島／(財)広島平和文化センター Hiroshima /Hiroshima Peace Culture Foundation	岐路にたつ日系アメリカ人—過去・現在・未来をつないで Japanese Americans at a Crossroad: Connecting Past, Present and Future
2008	福岡／(財)福岡国際交流協会、 (財)福岡県国際交流センター Fukuoka /Fukuoka International Association, Fukuoka International Exchange Foundation	日系アメリカ人との再会—移民百年の歴史を越えて— Reconnecting with Japanese Americans: Beyond 100 years of Emigration
2009	沖縄／沖縄県 Okinawa /Okinawa Prefectural Government	新たな絆の構築：「変革」する日系アメリカ人と日本との関係 Building New Networks: An Era of "Change" in Japanese American - Japan Relations
2010	東京／なし Tokyo	リーダーシップとは何か： キャリア、コミュニティ、そして文化への価値観を語る Leadership: Values in Career, Community and Culture
2011	大阪／なし Osaka	「内向き志向」への挑戦：グローバル競争時代における教育の役割 Breaking Out of the Comfort Zone: Role of Education in the Era of Global Competition
2012	仙台／せんだい・みやぎ NPO センター Sendai /Sendai-Miyagi NPO center	震災復興から日本再生へ：明日を拓く市民社会 Empowering Civil Society for the Future of Japan
2013	福島／福島大学うつくしまふくしま 未来支援センター Fukushima /Fukushima Future Center for Regional Revitalization, Fukushima University (FURE)	地域に生きる力：みんなの『声』が紡ぐふくしまの未来 Towards Common Ground: Connecting Diverse Voices for the Future
2014	福岡／なし Fukuoka	日系アメリカ人による地域の経済発展とリーダーシップ Japanese Americans making a difference in their community by "Economic development" and "Leadership" and in U.S.-Japan relations
2015	広島／なし Hiroshima	日米協力で目指す健康長寿社会：日系アメリカ人の視点から Aging and Dementia: Cooperation between the U.S. and Japan from research to health care
2016	神戸／神戸新聞社 Kobe /The Kobe Shimbun	安全な社会とは？：脅威と寛容のはざままで Toward a Secure Society: Challenges in Diversity and Inclusion
2017	金沢／なし Kanazawa	文化で読み解くコミュニティ～日系アメリカ人の視点から Culture and Community Engagement: A Japanese American Perspective

日系アメリカ人リーダー招へいプログラム / Japanese American Leadership Delegation

アメリカへの移民は、明治時代に始まり、いま日系人は全米で約130万人となっています(2010年国勢調査)。第2次世界大戦中のアメリカ政府による強制収容の試練を経て、現在では日系三世、四世、五世は政治、経済、教育など多くの分野で活躍するに当たっています。

本プログラムは、アメリカの日系人社会と日本の相互理解を促進し、日本との長期的な関係を強化することを目的として、外務省と米日カウンシルの共催により実施されています。

毎年、全米各地でリーダー層として活躍する日系アメリカ人を10名程度日本に招き、約1週間の日程で、東京とその他地方都市を訪問し、シンポジウムなどに参加のほか、政官民の幅広い有識者との交流や文化施設の視察などを行います。2017年で17回目を迎え、その間に累計197名を招へいしています。

国際交流基金日米センターは米日カウンシルの共催及び開催都市の国際交流団体等との協力により、「日系アメリカ人リーダー招へいプログラム」の一環として、訪日した代表団をパネリストに迎え、「日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム」を実施しています。

Japanese migration to the U.S. began during the Meiji Era (1868-1912), and there are about 1.3 million Japanese Americans in the U.S. (2010, national census). After overcoming the challenges of the internment camps during World War II, the Sansei (third generation), Yonsei (fourth generation) and Gosei (Fifth generation) have contributed enormously in such diverse fields as politics, economy and education.

The Japanese American Leadership Delegation Program (JALD) has been co-organized and conducted by The Ministry of Foreign Affairs (MOFA) and U.S.-Japan Council (USJC) to deepen mutual understanding and long-term relations between the Japanese American community and Japan. A diverse group of about ten Japanese American leaders are invited to Japan each year. This year marks the 17th year of this program, which has so far brought 197 Japanese American delegates to Japan.

Every year, CGP organizes the Japanese American Leadership Symposium under the auspices of the JALD program, with assistance from the U.S.-Japan Council (USJC) and other local organizations.

米日カウンシル / U.S.- Japan Council (USJC)

米日カウンシルは、日系アメリカ人のリーダーシップのもと、グローバルな視野で日米関係の強化に専念する組織です。米日カウンシルは、ネットワークやリーダーシップの革新的なプログラムを通じ、人と人との交流において、あらゆる世代の日本人とアメリカ人を活気付け、積極的な活動を奨励する役割を果たします。米日カウンシルは2008年に設立され、本部をワシントンDCに置き、カリフォルニア、ハワイと東京にスタッフを置いています。2012年には、TOMODACHI イニシアチブを支援するため、米日カウンシルージャパンが設立されました。2013年に公益財団法人に認定された米日カウンシルージャパンは、東京を本部としています。

The U.S.-Japan Council is a Japanese American-led organization fully dedicated to strengthening ties between the United States and Japan in a global context. By promoting people-to-people relationships through its innovative programs in networking and leadership, the Council serves as a catalyst to inspire and engage Japanese and Americans of all generations. The Council was founded in 2008 and is headquartered in Washington, DC with staff in California, Hawaii and Tokyo. In 2012, the U.S.-Japan Council (Japan) was created to support the administration of the TOMODACHI Initiative, and in 2013, it became a Public Interest Corporation (Koeki Zaidan Hojin). The U.S.-Japan Council (Japan) maintains an office in Tokyo, Japan.

(日) <http://ja.usjapanCouncil.org/> (英) <http://www.usjapanCouncil.org/>

国際交流基金日米センター / The Japan Foundation Center for Global Partnership (CGP)

日米が共同で世界に貢献し、緊密な日米関係を築くことを目的として、1991年に国際交流基金に設立されました。両国のパートナーシップ推進のための知的交流と両国の相互理解を深めるための地域・草の根交流の2分野で交流事業を行なっています。

The Center for Global Partnership (CGP) was established within the Japan Foundation in 1991 to promote collaboration between the people of Japan, the U.S., and beyond in order to address issues of global concern. CGP organizes or provides funding for collaborative projects to strengthen the global U.S.-Japan partnership and to cultivate next generation of public intellectuals to sustain this partnership.

(日) <http://www.jpjf.go.jp/cgp/> (英) <http://www.jpjf.go.jp/cgp/e/index.html>



国際交流基金日米センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-16-3

TEL: 03-5369-6072 FAX: 03-5369-6042

URL: <http://www.jpjf.go.jp/cgp/>

2017年10月発行 / 無料 ©2017 国際交流基金日米センター

Printed in Japan

無断転載、複写を禁じます。

写真: 相川健一 Photos by Kenichi Aikawa